

## 曹植評伝（一）

福井佳夫

### 一 汲汲として歎び無し

走馬灯の「うごく」

曹植は、死の床によこたわっていた。

ひとは、死のまぎわにいたったとき、その脳裏に、さまざまな記憶が走馬灯のごとくめぐり、またきえさつてゆくという。とすれば、このときの曹植の脳裏には、どんな思い出が想起され、どんな場面がめぐっていたのだろうか。

曹植が回想していたのは、おそらく、かつての得意の日々だったろう。そうだとすれば、彼の脳裏には、わか  
いころ、そう、十代ころの鄴ではなやかな日々が、うかんでいたはずだ。たとえば――

犬の吠えこえがきこえる。狩獵だ。たのしそう、だれがやっているんだらう。一騎、二騎、三騎。そして従者

が七八人、騎馬の前後をはしりまわっている。あ、前方にいた鹿がたおれた。二頭も。矢が命中したんだ。すごい、あんなに距離があるのに。だれが射たんだろ。あれ、栗毛色の馬にのったひと、あれは子桓（曹丕）兄さんじゃないか。そうか兄さんが射たのか。そして、そのむこうの騎馬は、子丹（曹真）おじさんだ。いいな、兄さんたち、きつとたのしいだろ。うな。

いまは春のおわり、なごやかな風がふきよせてきて、すごく気もちがいい。ここは、どこだろうか。あ、あの丘は見覚えがある。そうか、ここは鄴の郊外だ。鄴の西方にひろがっている、あの原野にちがいない。兄さんたちは供の者をつれて、ここへ狩猟にきてるんだな。いいな、自分も参加したい。どうして僕には、声をかけてくれなかつたんだろ。兄さん。

ふりむいてくれない。僕の声がきこえないのかな。ああ、腕がなる。おおきくなったら、兄さんたちにまじって、狩場、いや戦場へでたいもの。そうしたら、鹿や雉などではなく、敵の強兵どもに遠矢を射かけて、みごとうちとつてやる。そして大功をあげるんだ。あの漢の驃騎將軍、霍去病のように。

ああ、兄さん、後生だよ。気づいてよ、僕がここにいるんだよ。こつちをむいてよ、僕も狩りがしたい。おねがいだよ、兄さん、兄さん……。

ふいに舞台がかわった。あれ、ここはどこ。月の光が赤幕にふりそそぎ、灯火が酒酔いの顔をいつそうあかくみせている。男たちだけでなく、妓女たちもたくさんいて、たのしそうだ。こちそつがならび、笑い声がきこえ、箏の響きもきこえる。にぎやかな酒宴をやっているんだな。

こんどは自分も参加している。のけものじゃない。みなといっしょに車座になって、わらったり、うたったり。灯影のもとで、さかんに酒杯のやりとりもする。ああ、たのしい。むかいには王仲宣（王粲）どのがいる。その

となりには、ご高齡の郎（鄴淳）先生もいらっしやる。このお二人、熱心に議論していたが、とつぜんわらいだした。なにがおかしいのだろう。だれかの、南皮がどつしたとかいう声がきこえた。すると、ここが南皮の地なのだろうか。それとも、以前の思い出話をしているだけなのか。

涼風がふいてきて、酒酔いでほつた顔をさましてくれる。気もちいい風だ。ふと顔をあげてみると、馬車が到着したばかり。あたらしいメンパーがおりてくる。まっさきに下車したのは、子桓兄さんだ。つづいて劉公幹（劉楨）どのや繁休伯（繁欽）どのもおりてきた。たのしそつにわらいあつてゐる。庭園をめぐるつてきたのかな。いや、みな顔があかいので、ひよつとしたら他所で、一杯やっていたのかもしれない。

やがて仲宣どのが、詩を吟じはじめた。どうやら詩の吟詠をはじめたらしい。いろんな声が交代で、詩句らしいことばを吟じてゐる。だが、みな酒がはいつてゐるせいとか、どの声もしどろもどろで、よくきこえない。そのうち子桓兄さんが、いきなり僕のもとへやつてきた。そしてにやにやわらいながら、「楨、おまえも詩を吟じてみるよ。おまえは戦場で刀をふりまわすより、詩をつくるほうがむいてるような気がするな」などという。

僕は口をとがらせていった。兄さん、いじわるだな。いつもいつてるでしょう、僕は、詩をつくるのはきらいではないけど、でもそれ以上に、戦場にでたいんです。そうしたら、敵味方の軍勢が対峙したなか、先陣をきつて敵陣に突進してみせます。そして、さつと敵將の首をはねてやるんだ。それからまた――

また舞台がかわつた。やはり大勢で酒宴をしている。でもこんどは、なんとなく敵肅で、周囲の連中もすこし緊張気味だ。そうか、座の中央に父うえがいらつしやるからだな。父うえがデンとすわつておられると、やはり雰囲気ギリツとひきしまる。ふだんは野放図な劉公幹どのも、このときはばかりは神妙な顔をして、視線をおとしている。むりもない。父うえはなんといいつても、漢朝をささえる丞相さまだからな。われら曹家の者は、漢朝

におつかえもうしあげ、天子さまの命によって、不埒なやつらどもをけちらしてきたが、それはなんといいても、父うえあればこそだった。いつか、だれかが「漢室が安泰なのは、丞相さまが陛下をお守りもつしあげているからです」といつていた。おそれおおいことだが、でも父うえが天子さまのために、犬馬の勞をいとわなかったのは、僕もよく知っている。ほんとに父うえはずこい。

その父がいま、目をほそめながら、自分のほうをみてくれている。その隣には子桓兄さんもいるし、下座には仲宣どのや公幹どのもひかえておられる。そうだ、いまがいいかもしれない。父うえがおられるこの宴席の場で、できあがつたばかりの即興の詩を披露してみよう。ひよっとすると、父うえからお褒めのことばをいただけ、兄さんも感心してくれるかもしれない。こうおもつや、さっと手をあげてみた。すると、父がうんとつなずいてくれたのが、視野の隅にみえた。よし、いまだ。たちあがつて、自作の詩をよみあげよう――

その瞬間、曹植の意識は現実にもどった。そばにいたはずの父がない。兄も王粲も劉楨も、いない。それどころか、いま自分がいるところは、群臣や娼妓らがあふれていた、あの鄴の王府ではなかった。すきま風がふくうそさむい官舎の一室に、自分はよこたわっているのだった。そうか、夢をみていたのか。曹植はこうつぶやいた。だが、そのつぶやきも、瀕死の病人の咽喉から、すこしつよい呼気がでてきただけで、ことばとして正確にききとれた者は、だれもいなかった。

曹植はけつきよく、死の床からおきあがれなかった。はなやかな思い出とくるしい現実とのあいだを、なんとなく意識がいつたりきたりしたのち、やがて、ろうそくの火がきえるように、ふと息がたえてしまったのである。ときは太和六年（二三三）の冬十一月、場所は都の洛陽からはなれた陳の官舎、享年は四十一であった。魏朝の基をつくった曹操の息子として生まれ、天与の詩才をたたえられ、一時は父の後継ならんかと期待された曹植は、

こうして世をさったのだった。

### おだやかな死

曹植の死については、『魏志』本伝に「遂に疾を發して薨す」とあるにすぎない。右は、彼の死の場面を、私の想像でふくらませてみたものである。以下では常道にもどり、史書の記述に即してのべてゆこう。

この曹植、都からはなれた陳の官舎で、ひとり孤独に死んだわけではない。彼は「疾を發して」死んだのであり、急死や横死ではなかった。すると死の床の曹植の周囲には、彼の家族をはじめ、配下のもつめかけていたはずだ。彼は、そうした人びとにみまもられながら、波乱おおき生涯をとじたのだった。後世の人びとは、曹植の生涯を悲劇的なものにみなしがちだが、死の場面に関しては、おだやかだったといつてよからう。

では、具体的にだれが曹植の死をみつめたのか。史書はそこまでは記述しておらぬが、すくなくとも彼の妻や子たちは枕元にはべつていたとおもわれる。

この妻なる人物、詳細はわからぬが、公式的には「陳王妃」とよばれていたはずである。資料がのこる範囲では、植の二人目の妻だったはずだ（一人目の妻は、名臣の崔琰の兄の娘だったが、このときすでに故人）。曹植の死の年、すなわち太和六年の二月、植が陳王に封じられ、邑三千五百戸をたまわったとき（このとき、植は都洛陽にいた）、彼女も明帝から、「陳王妃となす」という璽書をたまわり、陳妃の印綬をもらったのだった。

このとき曹植は、「謝妻改封表」なる感謝の表をつづつて奏上した。「陛下のお恵みはまことに広大で、われら父子のみならず、わが愚妻まで、陳妃の印綬をたまわりました。このお沙汰、かがやかしく栄達の極みではございますが、おろかなわが妻などには、不似あいでございます」云々。かく曹植が謙遜した陳妃なる女性は、きつ

と曹植の枕元にあつて、彼の最期をみつたことだろう。

また子としては、男子二人がこの場にいたはずだ。曹植には、わかっている範囲で、四人の子がうまれている。男子が苗（長子）と志（次子）、女子が金瓠（長女）と行女（次女）で、あわせて四人である。だが、女子は二人とも乳児のうち死に、この時点では男子二人がいきているだけだ。この二子、まだ少年だったろうが、十年まえに、曹植の息子ということと、ともに郷公の爵をあたえられている（曹植はこの沙汰に対して、「封二子為郷公恩章」をたてまつつて、魏廷に感謝している）。

ただ、この「死んだ二女もあわせ」四人の子というのは、諸侯王としてはすくないように感じられる。すると、史書にしろるされておらぬだけで、あるいは四人以外にも、庶出の子たちがいたかもしれない（ただし『晋書』本伝は、曹志も「陳思王植の孽子<sup>けがし</sup>」だったとする。すると陳王妃は、正妻でなかったのかもしいない）。もしいとすれば、そうした子たちも苗や志とともに、曹植の枕元にあつまつていたはずである。曹植はすくなくとも、こうした妻子たちにかこまれて死んでいったのだろう。

彼の子のうち、もともすぐれていたのは、どうやら次子の曹志だったらしい。彼は、父の名をはずからしめず、学問をこのみ、才幹も有していたという（長子の苗のほうは、その後の事迹が不明。父の死後、まもなく死んだか）。そのため曹植は、この志を自分の後継にしたいとのぞんでいた。曹植の死後、その願いがききいれられたのだろう、この志が、父の官爵を継承したのだった。彼はのち濟北王に転封されたが、その後は領邑をなんとか加増された。またかなり長生きしたようで、父の死後も、魏晋交替をたくみにのりこえ、西晋の武帝から敬意をあらわされるにいたっている。

さらにその最期について、父の『魏志』本伝の末尾に、

曹志は母に死なれるや、喪に服して哀悼の情をつくした。おかげで病気にかかってしまい、精神の正常さをうしなうにいたった。太康九年に死んだ。

とある（裴松之注にひく『曹志別伝』）。この記事によれば、曹志は、太康九年（二八八）になくなったようだ。曹植が死んだ年、かりに十五歳だったとすれば、七十一歳で死んだことになる。さらに興味ぶかいのは、母（陳王妃）の喪に服し、それかきつかけで病気になって死んだ、ということである。とすれば母の陳王妃も、曹志とほぼおなじころまで生存していたわけで、これもずいぶん長生きしたことになるう。

本伝によれば、曹植は生前、といつても晩年のころだろうが、周囲のものに、質素な葬儀をするよう遺言した。さらに、東阿王だったときだろうが、魚山という山にのぼって東阿の地をみおろしたとき、ふいにこの地が気に入った、そこに自分の墳墓をつくらせている。こうした話柄は、彼自身が自分の死を予期し、それなりに準備していたことをうかがわせるものだ。こうした曹植の生前の願いは、陳王妃や曹志も承知していただろうから、おそらくすべてかなえられたことだろう。

曹植の冥福は、その後もつづいた。景初年間（二三七～二三九）というから、曹植が死んで数年後のこととなるが、明帝（二〇五～二三九。在位二二六～二三九。曹植の甥）から「追録陳思王遺文詔」という詔勅が発せられたのである。その大要はつぎのごとし。

陳思王曹植は、生前に過失をおかした。だが、その後は欲をおさえ行いをつつしみ、よく罪科をつぐなうた。そのうえ、わかいたときから死ぬまで、書物を手からはなさなかつたが、これは至難のことである。

については、生前の罪科をつづつた訴状は、すべて廃棄せよ。そして、曹植がかいた賦頌詩銘や雑論など百余篇を撰録し、副本は洛陽の内外に所蔵せよ。

この詔は、たいへん好意的なものだ。生前、なにかと問題にされてきた曹植の罪状（泥酔のあげく、朝廷の使者に狼藉をはたらいた等の事件。後述）をぜんぶ不問としてやるぞ、というのである。いわば一種の名誉回復だといつてよい。この沙汰は、亡き曹植もさることながら、のこされた妻子にとつても、たいへんありがたいことだったろう。

さらに、曹植が生前にかいた詩文を、すべて集録し、副本を都の内外に所蔵してくれるという。これは、出版という方法がなかったこの当時は、破格の厚遇だといつてよからう。曹植の詩文は、当時のひととしては比較のおおく現存しているが、それはこの明帝の好意的な詔が、功を奏したこともあったはずである。その意味ではこの詔、詩文にも造詣がふかかった明帝らしい、たいへんゆきとどいた沙汰だといつてよい。曹植の霊、もつて瞑すべし。

### 晩年の優遇

明帝から、かかる好意的な詔が下されることについては、そのきざしは、曹植の晩年ごろからあった。

中央政界から放逐されていた曹植は、地方から甥の明帝に上表をくりかえすようになった。それは、させしてほしい、してほしい、すべきだ——などと執拗に嘆願するもので、上表魔と称されてもよいほどであった。すなわち訴えの内容は、公私さまざまな事からにおよぶが、主要なものは「自分を国政に参与させてほしい」ということにあった（くわしくは後述）。しかしこれ以前、こつした曹植の訴えは、なかなかききいれてもらえなかったのである。

ところが太和三年（二二九）十二月、曹植が三十八歳にして東阿王に任じられたころから、すこし状況がかわっ

てきた。曹植の上書に対し、明帝からしばしば、このましい返答がかえってくるようになったのである。たとえば翌四年、曹植が国内の諸課題や辺將の配置などについて意見を上書したとき（いまは逸）、明帝は「答東阿王論辺事詔」という詔を發布して、曹植の献言をねぎらってくれた。その大要はつぎのごとし。

王の上書をなんどもよみかえした。朕は不徳であるうえ、武皇帝・文皇帝に死なれ、また下太后（一六〇）も冥界にゆかれたので、悲嘆にくれている。そのうえ政道にもくらのいで、呉蜀をなお誅滅できずにおり、民草も安心しすこすことができぬ。朕は兢兢として、おそれる日々をすこしている。

そうしたなか、王がわが帝室を補佐してくれるので、朕は頼りにしておるぞ。王は、自身を三監（周武王の弟だった管叔鮮・蔡叔度・霍叔処の三人をさす。この三人は武王の死後、周に反乱をおこした）などとして、卑下する必要はない。このたびご教示いただいた事案は、きちんと嘉納するであらう。王の高謀や良策、これ以後もききたいとおもっておるぞ。

この「答東阿王論辺事詔」、嚴可均は「当に太和三年に在るべし」というが、詔中に「下太后も冥界にゆかれた」（原文「武宣皇后、復即玄官」）とあるので、太和四年の作だとすべきだろう。

ところでこの詔、なかなか感歎な文面であるのに注意しよう。なかでも、「王の上書をなんどもよみかえした」（原文「覽省来書、至于再三」）や、「ご教示いただいた事案は、きちんと嘉納するであらう」（原文「諸所開諭、朕敬聽之」）などのことばは、曹植をたいへんよこばせたことだろう。

もとより詔は形式めいた行文なので、表面上の字句をそのまま解してはなるまい。ただそうであっても、「王がわが帝室を補佐してくれるので、朕は頼りにしておるぞ」（原文「王俠輔帝室、朕深頼焉」）、「王の高謀や良策、これ以後もききたいとおもっておるぞ」（原文「高謀良策、思聞其次」）などをよむと、明帝が叔父の曹植に、そ

れなりの敬意をはらっていることは、まちがいなさそうだ。

さらに太和五年、曹植は魏室の宗族（九族）どうしの交流をみとめ、また自分を明帝の側近としてとりたててほしいと上表した。この上書は「求通親親表」とよばれ、後日に『文選』にも採録された畢生の力作である。同種の主張は、異姓の廷臣、たとえば楊阜の「諫治宮室莠美女疏」でも主張されており、いわば世論のあとおしもあったのだろう。そのためか、この上書は無視されることなく、曹植は、明帝より丁寧な返答をもらうことができたのだ。すなわち、明帝は「詔報東阿王植」を発して、おおむねつぎのようにかたつた。

いま、諸国の兄弟間で自然な情理が通せず、妃妾の実家に膏沐代が不足ぎみだったのは、朕がなまけて親愛させなかつたからである。故事をひき議論をつくした東阿王の表文に、かかれているとおりだ。どうして王の衷心が心をつごかさぬことがあろう。

そもそも貴賤の別をあきらかにし、宗族を仲よくさせ、賢良をたつとび、長幼の順にしたがわすことは、経国の根本であり、宗室諸侯間の交流を禁止する詔などはあつてはならぬ。従前ゆきすぎがあつたのは、下吏が叱責されることをおそれたので、こうなつたのであろう。すでに役人に命じて、王の訴えどおりさせることにした。

つまり、宗族間の交流をみとめてほしいという曹植の訴えは、ききとどけられたのだった（具体的にはどんな措置がなされたのかは不明。あるいは、太和五年八月の詔がそれか）。

上書のもうひとつの訴え、すなわち、自分を側近にとりたててほしいという要望のほうは、かなえられなかったが、それでも曹の訴えの半分はききいれられた。なかでも、詔中の「朕がなまけて親愛させなかつた」「従前ゆきすぎがあつた」などの発言は、これまでの朝廷のやりかたに、無理があつたことをみとめるものだ。従前の

無視一辺倒とは、かなりちがった対応である。この曹植、文帝のときは、罪を着せられて誅殺される可能性さえあったのだが、そのときは様が変わりした様相だといってよい。

これに勇気をえたか、曹植は同年、さらに長大な「上疏陳審拳之義」という上疏をたてまつって、こんどは官吏登用法の改善をうったえた。このあたり、まさに上書の鬼という観がある。曹植はこれまで、よほど胸にたまったものがあつたのだろう。このときも明帝は、「ねんごろな文章で返答」（帝輒優文答報）してくれたのだった。

つづいて、曹植は「上書請免発取諸国士息表」をたてまつって、若者を労務や兵役に徵発することについて、これをやめるよう提言した。これも長篇である。すると、訴えはききとどけられて、「皆な遂に之を還らしむ」（『魏志』本伝の裴松之注）。若者はみな帰郷することができたのである。つまり、このときの上表は、魏の国政に多少とも影響をあたえることができたのだった。曹植は自分の上書に手ごたえを感じたことだろう。

さらにつれしいことがあつた。太和五年八月、とつぜん明帝は宗室の諸侯王たちに、「令諸王及宗室公侯各將適子一人入朝詔」という詔を發布し、「翌年正月、嫡子ひとりをつれて都の洛陽へ参内せよ」と命じたのである。その詔にいわく、いにしえ、諸侯を朝廷に参内させたが、それは、宗族をなかよくさせ、万国を協和させるためだった。先帝（父の文帝）のときは、政治的事情があつて、参内をゆるすことができなかった。おかげで、朕は諸王らと十二年ものあいだ、対面することがなかつたのである。どうして敬慕の情が、いやまさずにおられるよつか云々。

この詔が發布されるや、曹植は狂喜したことだろう。我われ宗室の王たちに上洛がゆるされた。あの繁華な都洛陽へ、息子ともどもでかけてゆけるのだ。なつかしい宗族たちともあえるだろう。曹植は、これは自分が「求通親親表」をたてまつつたことの成果ではないか、とおもつたかもしれない。いや、たぶんそうおもつたことだ

ろう。そして、ひそかに期待したかもしれない。昨今の陛下は、我われ宗室の者に、好意的な姿勢をしめしてくださっている。とすれば、かねての念願、すなわち「明帝の」叔父たる自分が、魏の中央政府にまねかれ、国政に参与してゆく、そんなこともありうるかもしれない——と。

かくして曹植は「たぶん」太和五年の冬、胸をふくらませて洛陽にむかったのだった。このときの曹植の昂揚感をよく反映した作がある。それが「請赴元正表」と題された表であり、

百官の礼容ぶりに心おどりつつ、朝見の儀を心中に想像しています。わが耳には雅楽の音がひびき、わが目には祝賀の舞がみえるかのようです。

「欣豫百官之美、耳存九成、

「想見朝覲之礼、目想率舞、

の四句のみがつたわっている。題からすると、この表は、「上洛したさいは、元会（後述）に参列させてほしい」と嘆願したものだだろう。そして、「もし参列がゆるされたなら、こんなふうなんだらうな」と想像したのが、右の四句の断片なのだろう。その意味で、この四句は、上洛まえの曹植のはずんだ気もちを、よくつたえるものといつてよい。この表、嚴可均は黄初四年の作とする。しかし徐公持『曹植年譜考証』三百八十六頁が指摘するように、太和五年、明帝の詔を拝読したあとの作とすべきだろう<sup>2)</sup>。

## 最期の年

かくして年末には到着し、翌太和六年の正月は洛陽でむかえたはずだ。曹植はこの年、洛陽と陳国とですこしたのだが、喜と悲の感情がはげしく交錯する日々がつづいた。そして同年の十一月、彼は悲の感情の極にいたり、

「疾を発して薨す」という終局にいたったのだった。彼の死でおわるこの最期の年は、すこしていねいにみてゆく必要があるとすだ。

「くおおぞつばに説明しておけば、この年、前半（洛陽ですこした）は「喜」の感情につつまれていたが、後半（陳国ですこした）になるや、「喜」にかわって「悲」の感情におおわれ、落胆し、絶望し、ついに世をさつてしまった——といつてみかろう。

まず、前半の「喜」の感情につつまれた日々を叙してゆこう。

この日々、曹植はおおくの詩文をものしている。ひさしぶりに洛陽にやってき、きらびやかな宮中に入り出すことができた。洛陽の繁華な街なみ、そして豪壮な宮殿群を一見するや、彼は感激し、喜びにふるえたに相違ない。そつした感激や喜びに刺激され、いっきに曹植の詩囊がふくれあがった。かくして、おおくの詩や文章がかかれていったのである。そつした諸作を紹介しながら、この時期の曹植のようすをつかがってみよう。

まず到着後、すぐ明帝へのお目どおりがなつたようだ。感激した曹植はそのときの喜びを、「謝入覲表」といふ表で、

臣は辺隅の地（東阿）を出立し、百官の礼容ぶりを拝見することができました。これが第一の喜びでございます。茅茨の陋屋をでて、宮殿の門中にいることができました。これが第二の喜びでございます。また恥ずべき姿で、かしこき竜顔にまみえることができました。これが第三の喜びでございます。そしておろかな臣でありながら、これから陛下のお教えをこつむることができるのです。これが第四の喜びでございます。

臣 得出幽屏之城、此一喜也。 背茅茨之陋、此二喜也。

獲觀百官之美、

登閭闔之闥、

「必以有靦之容、此三喜也。將以櫛杙之質、稟受崇聖之訓、此四喜也。  
 「瞻見穆穆之顔、

とかたつている。上洛まえの「請赴元正表」でも、「百官の礼容ぶり」（百官之美）を想像していたのだが、この第一の喜びにおいても、おなじ語を使用しているのに注意しよう。ただこの表では、想像ではなく、百官を實見したうえでのものだ。曹植、さぞうれしかったことだろう。

これ以後、曹植はさまざま儀式に参加し、さまざまものを見物した。そしてそのたびに、自身の感動を詩文につづっていった。「元会詩」「罷朝表」「謝周觀表」「謝賜黍表」「謝明帝賜食表」「謝鼓吹表」などが、それである。凡人だったら、「すごいなあ」「うれしいなあ」と声にだす（あるいは心中におもう）だけで、そのまま宙にきえてしまふところだ。しかし、そこは天稟にめぐまれた曹植のこと、自身の感動や喜びをさつと詩文に昇華できたのだった。

念願の元会の儀にも、参加できた。元会とは、天子が元旦に朝臣を一同会せしめる儀式のことで、また正会とも称する。曹植はこの儀式に、他の諸侯王とともに招待されて参加したのだった。ながらく地方においやられていた曹植にとって、ひさびさの出席だったはずであり、きつとうれしかったのだろう。さっそく「元会詩」という慶賀の詩をつくったのだった。ただ、この詩はながいし、それほど内容のあるものでもないで、ここでは書きだして引用するだけにしよう。

初歳 元祚、吉日 惟れ良し。

乃ち嘉会を為さんと、此の高堂に讌せり。

尊卑 列叙し、典にして章らかなる有り。

衣裳 鮮潔にして、黼<sup>ほ</sup>黻<sup>ふ</sup> 玄黄なり。

清酏 爵に盈<sup>み</sup>ち、中坐に光を騰<sup>あ</sup>げたり。

珍膳 雜<sup>ざう</sup>逐<sup>とく</sup>し、円方に充溢せり。

笙磬 既に設けられ、箏瑟 俱に張らる。

悲歌 厲<sup>はげ</sup>しく響き、清商を唱<sup>な</sup>ず。

俯<sup>ふ</sup>しては文軒を視<sup>み</sup>、仰<sup>あ</sup>ぎては華梁を瞻<sup>み</sup>る。

願<sup>ねが</sup>はくは茲<sup>こゝ</sup>の善を保ち、千載に常たらんを。

歡笑して娛<sup>も</sup>しみを尽くし、楽しいかな 未<sup>な</sup>だ央<sup>つ</sup>きず。

皇家は榮貴にして、寿考 疆<sup>かぎり</sup>無<sup>な</sup>からん。

新年をめでつつ、魏室を賛美した儀礼的な四言詩である。溢美の言をつらねた篇什だが、たのしげな気分がみちているのに注意しよう。ひよっとすると、この詩、個人の立場でつくったのでなく、明帝の命によって、曹植が諸侯を代表してつくったものかもしれない。すると、群臣がいならぶ元会の場で、朗々とよみあげられた可能性もある。もしそうだったとすれば、曹植はその光栄に感激し、よろこびをかみしめたことだろう。罪をおかしたために、辛酸をなめてきた自分。その自分が、ようやくゆるされ、かく新年の元会に列している。なんとうれしいことか——と。

このとき、元会の場には、だれがいたのだろうか。

まずは、魏朝をささえる重臣や將軍たちがいたはずだ。重臣の鍾繇や華歆、王朗らもう逝去していたが、陳羣はまだ健在だった。すると陳羣は、楊阜や蔣濟、高堂隆などをしたがえ、廷臣のトップとしてこの場にのぞん

でいたことだろう。いっぽう、山陽公こと元後漢の献帝は、まだ生存していたので、あるいは賓客として招待されていたかもしれない。

將軍のほうは、なお戦争中ということもあり、ややさみしかったとおもわれる。古参の曹休や張郃は、この時点で亡くなっていた。曹真も昨年のうちに死去し、やや軽量級の曹爽が跡をついでいた。軍事の元締めといべき司馬懿は、諸葛亮ひきいる蜀軍への対応のため、この場にはいなかったはずだ。ただ、第二世代といべき満寵や王淩らは、この場に列席していた可能性はある。

では、魏の宗族としては、どんなメンバーがいたか。魏朝ではながいこと、宗族どうしが交際することは禁じられていた。だから、おたがいにひさしぶりの対面だったはずだ。曹彪や曹袁らの「曹植の異母」兄弟があつまつて、ややあやあと、うれしそうに久闊を叙したことだろう。彼等はみな、へだたつた遠地に居住していたので、なおさら都で再会できたのがうれしく、手をとりあつてよろこびあつたに相違ない。

元会に列した宗族のなかで、曹植は特別の存在であった。彼は、なんといつても魏室の嫡流（曹操と卞后の息子）であり、唯一いきのこっている明帝の叔父（文帝 曹丕、曹彰、曹熊はともに故人）だったからである。さらに、偉大な曹操にかわいがられていたこと、しばしば政治的具申をおこなっていたこと、詩人としての名声が卓立していたこと等の経緯もあつて、魏室の重鎮と称されてよい立場にあつた。

これより四年まえの太和二年（二二八）、明帝が蜀との戦いに親征して長安に滞在していたとき、首都の洛陽に「曹叡が崩御され、曹植が踐祚した」というデマがながれたことがあつた。明帝の息子は夭折し、まだ後継がはつきりせぬ時期だった。つまり当時にあつて曹植は、明帝に万一のことがあつたとき、第一に想起されるべき人物だったのである。それだけ魏室でももんじられ、また警戒されるべき存在になつていたのであった。そうした

微妙な状勢下での、この「元会詩」の創作「や、もしあったとすれば、式場での朗読」は、あらためて廷臣らに、彼の非凡さをみせつけることになったとおもわれる。

前半の「喜」の日々は、まだつづく。曹植をとくによるこぼせたのは、おそらく明帝がしめしてくれた親近ぶりだったろう。曹植は、成人した甥の明帝（この時点では二十八歳）とは、はじめての対面だったかもしれない。ところが明帝は、想像以上の親しさぶりをしめしてくれたのである。つぎにしめすやりとりは、両者最初の対面のとぎらしいので、ひよっとしたら、まだ右の元会よりまえだったかもしれない。

「明帝与陳王植手詔」王（曹植）は顔つきがやつれているが、どうされたのか。身体の調子がわるいのではないか。最近はず、どれほど米をたべ、肉を口にしているのか。王のやつれぶりに、朕はおどろくばかりだ。飲み物だけでなく、よく食物をとるようにせよ。

王顔色瘦弱何意耶。腹中調和不。今者食幾許米、又啖肉多少。見王瘦、吾甚驚。宜当節水加餐。

「曹植謝明帝賜食表」ちかごろ臣は、陛下よりごちそうをたまわりました。表をたてまつり、あつく御礼もつしあげます。さらに手詔までたまわって、臣の瘦弱ぶりをご心配いただきました。臣は、陛下の直筆の詔を拝読した日は、涙がとまりませんでした。あの周の文王武王も、よく臣下をいたわりなさいましたが、陛下のご厚情にはとてももかいません。

近得賜御食、拜表謝恩。尋奉手詔、愍臣瘦弱。奉詔之日、涕泣橫流。雖文武二帝所以愍憐於臣、不復過於明詔。

右の明帝手詔と曹植表とは、明帝の集と曹植の集とに別々におさまっているが、おそらく対応しあうものだとおもわれる。ここで注目したいのは、明帝が曹植にしめす親近ぶりである。明帝は親身になって叔父（曹植）の

体調について、「顔つきがやつれているが、どうされたのか」「身体の調子がわるいのではないか」などと心配している。そうした内容に対応して、詔中のあちこちに口語的語法（傍点）が散見しており、行文のうえからも、親近さをしめしている。おそらく、叔父さん（曹植）がただごとはおもえぬほど、よわったふうにみえたので、甥の明帝はこうしたことをかけたのだろう。曹植はこの年の十一月に逝去するのだから、じっさいに病んでいたのかもれない。

本伝にしろすところによれば、明帝は吃音ぎみだったらしい。そのため、ふだんから口数がすくなかったという。すると明帝はこのときも、口頭でかたるかわりに「自分で、あるいはお側の者が」字句につづり、それを曹植にしめたのだろう。そして曹植も帝にあわせ、文書で返事をかえた。いわば筆談のようなものだったのだろう。だからこそ、こうした手詔や表がのこり、現在までつたわっているのだとおもわれる。

明帝とのしたい「筆談での」会話は、ほかにもつたわっている。明帝は、涼州の地から遠路はるばる献上された奈（果物の一種）を、「これは涼州からきたものじゃ。道がとおかつたし、この地はあたたかいので、すこし変色しておるがな」といつつ、植らにたまわってくれたらしい（これも口頭でなく「報陳王植等詔」である）。これに感激した曹植は、「奈は夏のものなのに、このさむい時期にたまりました。旬ならざるごときに入手すれば、「涼州の」果物は貴重に感じられますし、美味なものを賜与されれば、「陛下の」恩情が値千金に感じられます」といつて感謝したのだった（謝賜奈表）。

またこのとき、明帝は芳林園に承露盤を鑄造させていた。園中を散策し、その承露盤を曹植らにみせるや、つぎのようにかたった。「先帝のとき、甘露が仁壽殿におりてき、靈芝が芳林園に生じたものだが、わしが承露盤をつくっても、甘露が芳林園や仁壽殿にふりそそいでくれたぞ」と（与陳王植詔）。すると曹植はすかさず、「岩

岩<sup>ちよう</sup>たる承露、峻<sup>たか</sup>くして太清に極<sup>いた</sup>る」云々とはじまる「承露盤銘」をつくって、明帝にささげたのだった。こうしたことも、この時期の両者の親しさぶりをしめすものだろう。

さらに、こんなこともあった。ちょうど曹植らが洛陽につどつていたとき、明帝の生時もない女兒（曹淑）が逝去したのだった。その死をかなしんだ明帝は、自分で亡き娘のために、「故平原公主誄」という誄をつくったのである。

ところが明帝は、その自作の誄が気に入らなかつたらしい。曹植にこうかたつた。余は文才がおとり、とりわけ賦誄の類は苦手だ。娘の陵墓から帰還したのち、悲しみの情がおさまらず、娘の誄をつくってみたが、まるで「田舎おやじがつくつたかのようにだ、と（詔陳王植）。すると、曹植は如才なくこたえた。陛下の「故平原公主誄」を拝読しましたが、表現と内容がよく調和し、章も句もともに卓越いたしております。その哀悼ぶりたるや、聖明の士を感動させ、天地もつらぬくほどでございます。私が陛下の誄を誦するのをきくや、楚王の曹彪らはみな涙をこぼしたものでした（答詔示平原懿公主誄表）。

こうした「文書による」やりとりがあつたのち、曹植は明帝から依頼されたのだろう、明帝の亡娘のために、あらためて誄をつくつた。それが現にのこる曹植の「平原懿公主誄」という作である。参考までに、この作を訳出しておこう（なお、「田舎おやじがつくつたかのように」と謙遜した明帝の誄は、現存していない。自分で破棄したのでらう）。

下をみれば大地がゆれ、上をみれば天文もみだれている。悲風がふきつけ、霜がおり雪がまつ。蘭はしばみ蕙はかれ、樹幹もいたんでしまった。

ああ、亡き平原懿公主さまは、麗質をお持ちだった。卜占にかなない天運にに応じて生まれ、美貌にめぐまれ

ていた。聡明なお姿をもち、神情は明朗かつ純一であった。

うまれて百日ほどで、もつひとや物を識別でき、し容姿は陛下に似ておられ、お声は音律になつていった。ひとがはなれば首をあげ、ひとがちかづけば首を上げた。あやすとよくわらい、声をかけるとにつこりされた。いつも乳母が手をそえ、侍女がそばにはべり、襦袢むすひにつつまれ、蒲団におかれぬほど大事にされた。宮中のひとからかわいがられ、陛下からも愛されていたのである。

ところが、とつぜん災禍におそわれ、魂は肉体をさり、霊は天にかけあがつた。大声でよんでも応じず、声をきこつにもきけない。陛下はお嘆きになり、嗚咽して声もかれはてた。ああ、かなしいことだ。

陛下は、懿公主が早世し、命数がうしなわれたのをいたまれ、公主を平原郡に改封されたが、そこはかつての陛下の封地だった。ここに地をあたえ家をおこし、藩国として領邑とした。「遺体が」身におびた緄珮は色あざやかで、朱紱もかがやいている。

だが藩国も有するとはいえ、ひとりなのをあわれに思しめされた。そこで公主を「やはり夭折した」甄黄と結婚させたが、彼ももともと高貴な身。さらに列侯の爵位をたまひ、銀印と印綬もさずけた。かくして宮中で「死者どうしの」婚礼の儀を挙行し、それから靈車はこもこも都を出発したのだった。このお二人、生前は同居しなかつたが、死後は山陵でともにすこすのである。

山陵には墓室がつくられ、その内部には玉石がしきつめられる。朱房と皓壁とは、電光のようにあざやか。公主は栄爵があたえられ、その待遇はいきているかのよう。公主の墓地は整備され、墓室の扉もあいている。二柩がおろされたが、双魂はだれをたよるのだろうか。

ひとはみな死ぬ定めだが、早世はいっそう無念に感じられる。乳母はなきさけび、陛下も御心みこころをいたたま

れる。『詩 子衿に「一日が三月のよう」とあるが、公主は「三月どころか」永久に歳月をつしなわれた。墓室の扉がとじられるや、もはや二度と姿をみることはかなわないのだ。

俯振地紀、悲風激興、霜飈雪霽、凋蘭天蕙、良幹以泯。  
仰錯天文。

於惟懿主、瑛瑤其質。協策応期、含英秀出。岐嶷之姿、実朗実一。生在十旬、察人識物。

儀同聖表、驥眉識往、求顏必笑、阿保接手、常在襁抱、不停第牀。專愛一宮、  
声協音律。俛瞳知来。和音則孩。侍御充旁。取翫聖皇。

何凶奄忽、罹天之殃。魂神遷移、号之不応、帝用吁嗟、嗚咽失声。嗚呼哀哉。

精爽翺翔、聽之莫聆。

憐爾早歿、不逮陰光。改封大郡、惟帝旧疆。建土開家、邑移蕃王。

琨珮惟鮮、国号既崇、哀爾孤独。配爾名才、華宗貴族。爵以列侯、銀艾優渥。  
朱紱斯焯。

成礼于宮、靈輜交轂。生雖異室、歿同山岳。

爰攜玄宮、玉石交連。朱房皓壁、晴曜電鮮。

節終備位、長埏繕修、神閨啓扉。二柩竝降、双魂孰依。人誰不没、憐爾尚微。  
法生象存。

阿保激摧、城闕之詩、以日喻月。況我愛子、神光長滅。局闋一闔、曷其復晰。  
聖上傷悲。

## ぬか喜び

曹植の最期の年、「喜」の感情につつまれていたのは、この前半ごろまでだった。やがて後半にすすむや、「喜」は「悲」の感情におおわれて、あっけなくきえてしまったのである。その結果、曹植は落胆し、絶望して、あえなく世をさつてしまった。ここでは、そうした経緯をかたろう。

元会への参列や明帝との親交は、曹植にとつてうれしくはあつたろうが、しかしまだ最善のことではない。というのも、曹植はこのとき、もつとおおきな希望をいただいていたからである。その希望とは、しがない地方官から足をあらつて魏の中央政府にまねかれ、国政に参画してゆくことであつた。

自分はいまや年輪をかさね、陛下の叔父という立場となつた。そうした自分にとって、小道にすぎぬ銘誄の文をつくつて、腕前をたたえられることなど、たいしてうれしいことではない。そんなことより、陛下から特別のお目どりをたまわつて、ふたりだけで時勢を論じあいたい。そして、おのが識見を披露し、朝廷の高官にとりたてていただく。そうしたら、わが手で魏朝にまつるわぬ連中を征伐し、文帝のときこつむつた罪科をつぐなうことができるだろう、と。

曹植は、今回の上洛こそ、そうした念願をかなえる絶好のチャンスだ、とおもっていたようだ。というのも近時の明帝は、いままで冷遇してきた曹植「やその他の宗族」に、「以前とはちがつた」好意的な処遇をあたえてくれていたからである。

たとえば、この二月に、宗室の諸侯を県王から郡王に格上げしてくれた。その措置により曹植も、あらたに陳の四県をあたえられて陳王となり、領邑も三千五百戸まで増加した。さらに、妻も陛下から「陳王妃となす」という沙汰をたまわつたのである（前述）。

さらに、もうひとつ。それは、偶然のことながら、魏朝の対外戦争に対し、直接に意見をたてまつることができたことだ。曹植が上洛しているとき、明帝は、遼東の公孫氏を攻撃させていた。平州刺史の田豫には海路で、幽州刺史の王雄には陸路で、それぞれ進攻を命じていたのである。この外征に対しては、不要不急のこととして反対する廷臣もすくなく、当時の重要な外交案件となっていた。

この件を耳にした曹植は、「国政好きの」血がさわいだのだろうか、諸侯王の立場でありながら、すぐ明帝に「諫伐遼東表」をたてまつった。「臣伏して以うに、遼東は阻を負いし国にして」云々とはじまる曹植の表は、大要つぎのようである。

遼東の地は険阻な地で、海にもかこまれておりますれば、なかなかせめきれぬ国ではありません。かりに占領できたとしても、多大な犠牲をはらうのみならず、見返りにえられるものは、ほんのわずかです。

当今の務めは、そうしたことよりも、民衆の徭役や賦斂をすくなくし、彼らを農桑につとめさせるべきです。かくすれば、太平の基はしっかりと樹立されるはずで、そうなれば、遼東の公孫氏の動向など、どうして気にする必要がありませんか。

結論としては、曹植は、この遼東進攻に反対したのである。この表の上奏、曹植みずからすすんでのことなのか、それとも明帝から意見をもとめられてのことなのか、そのあたりはわからない。ただ、たまたま宮中にいた地方の王にすぎぬのに、「国政に関する」表を上奏することがゆるされたのである。曹植としては、これまでとはちがう手こたえを感じたことだろう。

本日、表をたてまつったので、たぶん近日中に陛下のもとへとどくはずだ。すると、その表はやがて朝議にかかれ、いろいろ評議されることだろう。廷臣たちはどう判断するだろうか。そして陛下はいかにお思いになら

れるだろうか。ひよっとするとこの自分、陛下のお召しにあずかって、直接に意見を徴されるやもしれぬ。そのときは、どうお答えすればいいだろうかなど、曹植の胸はおどつたに相違ない。

そして心中、こつおもつたのではあるまいか。こうした昂揚感にはひさしぶりだ。血がさわぐというが、気分がふるいたつというが。国政に参画するということは、こんな昂奮をあげわづことなんだな。ああ、わくわくする、ときどきする。これからもずっと宮中において、こんな日々をすごしたい、と。

この「諫伐遼東表」上奏をきつかけに、曹植はこれからの日々、おおいに期待をもつたこととおもわれる。「ひよっとしたら、「地方にかえることなく」このまま洛陽にとどまれという命が、陛下からくだされるやもしれぬ。そうすると、私は陳でなく、この洛陽に転居せねばならない。さあ、いそがしくなるぞ」と、希望はふくらんでいったことだろう。

ところが、そうした希望はかなえられなかった。その後、明帝からはなんの沙汰もなかった。廷臣への取りたてや、遼東征伐への意見聴取もないまま、やがて地方へ帰国する時期となったのである。こんなはずはない。陛下から呼びだしがあるはずだ。曹植はじりじりとあせつたことだろう。ああ、なにもない。なんの沙汰もない。過日の「朕は頼りにしておるぞ」という詔も、いかにも親近そうな態度も、口うるさい叔父さん（＝曹植）への親切ごかしにすぎなかったのか……

かくして、曹植がねがった、明帝とふたりだけで時勢を論じあう機会は、ついにもてなかった。いや、曹植の願いを感じとつた明帝、あえてそうした機会をさせたのかもしれない。明帝は当初から、曹植を国政に参画させるつもりはなく、すべて、曹植のひとりよがりすぎなかったのである。

かくして、曹植はさみしく帰国した。今回の洛陽行で、郡王に格上げされて陳王となり、領邑も多少はふえた。

だが実態としては、あいかわらず、地方の一郡をまかせられているにすぎない。国政参画の機会はおおきき、この後もおそらくチャンスはないだろう。

曹植、明帝の好意的な態度に、こんどこそと意気こんでいただけに、その反動はおおきかった。そのためだろう、曹植はすっかり気分がおちこんでしまい、けっきょく同年の十一月、陳国であっけなく死んでしまったのである。『魏志』本伝は、彼が死んだときの状況を、つぎのように叙している。

曹植は洛陽からかえるや、がっかりして望みをうしなってしまった。当時、魏の国法として、藩国への待遇がたいへん苛酷だった。「藩国の」役人どもはみな、商人ふぜいか無能な連中ばかり。兵士たちも、老残の者しか派遣してもらえず、二百人よりおおいことはなかった。さらに曹植は以前の罪科があったので、なにかあることに半減され、十一年に三度も領地をかえさせられた。

彼は、いつも小事にあくせくして楽しみもなく、けっきょく病気がかかって死んでしまった。ときに四十歳であった。

この記事は、曹植後半生の不遇な日々と、そしてそうなった理由とを明快にかたてられている。かかる日々の積みかさねのうえに、今回の上洛時の期待と、そして落胆とがあったのである。結果的にいえば、こうした不遇と落胆とが、曹植を絶望においこみ、その死期をはやめたといつてよからう。

## 魏の国法

右の記事で、もうひとつ注目したい箇所がある。それは、「当時、魏の国法として、藩国への待遇がたいへん苛酷だった」という一節である。これによると、曹植たち魏の宗族が冷淡に遇されたのは、どつやら「魏の国法」

(原文「法制」)にしたがったからであり、具体的には、藩国を苛酷に遇する方針が、その国法だったということになる。

「こつした魏の国法は、いつから、どつした事情ではじまったのだろうか。『三国志』に注した裴松之は、孫盛『魏氏春秋評』をひいて、つぎのようについて、

奇妙なものだ、魏の封建たるや。先王の大典にのつとらず、藩屏を守りとせず、親族がむつみあい、宗族が本家を守護するよう、させなかった。

漢初の封建では、藩国が朝廷とはりあつほど権勢をほこっていた。よくないことだったが、時勢でそうなったのだ。ところが魏の諸侯たるや、「漢初とおおちがいで」匹夫にひとしい存在だった。これは、魏廷が七国の乱にこりたためだったろうが、あまりにひどすぎた待遇である。

この孫盛の見かたにしたがえば、藩国を苛酷に遇したのは、魏廷が漢初の七国の乱にこりたためだったという。この漢初の乱とは、正式には呉楚七国の乱といい、前漢の景帝のとき(紀元前一五四)におこった、宗室たちの反乱をいう。簡単にいえば、権限をつよめたい漢の中央政府と、半独立状態のままていたい宗室の地方王(ともに劉姓)との対立であり、いわば宗室内における指導権争いというべきものであった。この乱は、呉や楚など七国の王が反旗をひるがえした大規模なもので、最終的にはなんとか中央政府が勝利したものの、景帝の心胆をさむからしめた大乱であった。

魏朝がこれにこりたということ、つまり地方に有力な同姓諸侯をつくらないと決意した、ということの意味している。したがって、宗室の曹植らに権力をもたさず、抑圧し、冷遇しつづけるのは、そうした魏朝の方針にもとづくものだったといつてよからう。明帝も、父文帝の方針を継承して、宗族の抑圧政策は変更するつもりは、

なかつたのである。<sup>5)</sup>

こうした宗族抑圧政策は、「魏の国法」だっただけに、曹植にのみ適用されたわけではなかつた。他の兄弟たちにも、ひとしなみに適応されたのである。『魏志』巻二十の「武文世王公伝」は、曹操と文帝の皇子たちの伝をあつめた巻であるが、その末尾の「評曰」に、つぎのようにいう。

魏の王公たちは、領地を有するという名目はあつても、藩国としての実態はなかつた。朝廷からいろいろ禁止され、へだてられ、あたかも牢獄にいるかのようにだつた。地位や称号も不安定で、領土の大小も歳ごとにかわる始末だつた。骨肉の恩情はうらぎられ、「なかよし兄弟の」常棣の義は皆無だつた。魏の国法たるや、かかる弊にいたつたのだつた。

陳寿は「牢獄にいるかのようにだつた」という。すると、嫡流以外の皇子（正室以外の女性がつんだ子）の場合、曹植よりもっと待遇がわるかつたのかもしれない。裴松之は、この部分に「袁子」という文献をひいて、彼らのあわれな状況を、より詳細に説明してくれている。

宗室諸侯がおさめる地では、老兵百余人が国をまもっているだけだつた。王侯の名はあつても、匹夫の身とかわりはなかつた。朝廷から千里の外に隔離され、朝聘の儀とてなく、隣国と会同することもできなかつた。諸侯らが狩りにでて、三十里以上はとおくへゆけず、つねに防輔と監国の官がいて、監視されていたのである。

おかげで諸侯らはみな、「自由な」布衣の身になりたいとねがつたが、それもできなかつた。こうしたやりかたは、宗室が藩屏となる考えとたがっていたし、親戚や骨肉の恩情にもそむくものであつた。

「老兵百余人」というのは、曹植の「二百人よりおおいことはなかつた」よりすくない。布衣の身になりたい

とねがったというのだから、よほど日々の生活が窮屈だったのだろう。このようにみえてくると、宗族の冷遇は、まさに「魏の国法」であって、曹植もそうだったが、彼以外の宗室の人びとも、やはり冷酷な待遇によってくるしんでいたのである。

### 幸運のひと

話題がすこしそれてしまった。曹植にもどうだろう。こうして死んでいった曹植を、当時の識者たちはどう評していたのだろうか。まず、陳寿は『魏志』本伝末尾の「評曰」で、つぎのようにかたっている。

陳思王の曹植は文才ゆたかで、後世にまでかたりつがれるだろう。だが、彼「や曹彰」は謙抑して災いをふせぐことができず、けっきょく「天子との」不和をまねいてしまった。『伝』に「楚は失敗したが、斉も成り功したとはいえない」というが、曹植はこのことばにあてはまるだろう。

「謙抑して災いをふせぐことができ」なかつたため、不遇な目にあつてしまった男。これが、陳寿の曹植評である。彼のゆたかな文才はみとめながらも、人がらについては、たかい評価はしていない。「楚は失敗したが、斉も成功したとはいえない」（司馬相如「上林賦」の一節）ということばは、不遇のいくぶんかは、曹植にも原因があつたといわんばかりである。この陳寿、どうした立場で曹植伝を叙したのかわからぬが、かならずしも曹植に同情的な見かたはしていない。

『魏志』の同個所に、裴松之によつて魚豢の発言（書名をださぬが、『魏略』だろう）がひかれている。こちらの見かたは、曹植にもつとぎびしいものとなつている。すなわち、

もし太祖の曹操が、ずっと以前に曹植等を抑制していたならば、彼らのような賢明な人びとの心のなかに、

帝位をのぞむような野心がおこったであろうか。曹彰は恨みをもって、なにこともなさなかつたであろうし、曹植のほうだって、どうして争いをおこすことができたであろうか。

という。つまり魚豢は、曹植や曹彰らはいつとき、帝位をつかがう野心を有し、なにことか（具体的には不明）をしてかした、とかたっているのである。父の曹操が曹植らをあまやかしたので、彼らが図にのつてよからぬことをしてかした、とかんがえているようだ。けっして好意的な批評ではない。このように、当時の識者たちは、曹植をかならずしも気のどくな被抑圧者とは、みなしていなかつたようである。

ところが文学史のうえでは、そつした見かたはされていない。曹植は、すばらしい文才をもつがゆえに、かえて兄の曹丕から嫉妬され、警戒された。そのため不当ないじめをうけ、不遇のうちで死んでしまった——とみなされている。いわば「不遇な天才」イメージである。こつした見かたはおそらく、あの有名な「七歩之才」の話柄がひろまったためだろう。「文帝（曹丕）嘗て東阿王（曹植）をして七歩中に詩を作らしめ、成らざれば大法を行はんとす。声に応じて便ち詩を為りて曰く、云々。帝深く慚づる色有り」。この話が『世説新語』文学篇に収録されるにおよび、曹植はいちやく不遇な天才になってしまったのだった。

こつした「不遇な天才」イメージが、後世の人びとに判官びいきをひきおこし、曹植の人がらを、そして文学を、実際以上にたかからしめることになった。たとえば、『文心雕龍』才略篇では、兄の曹丕の文才をたかく評価しながらも、

だが、世間の俗情はうつろいがちで、付和雷同きみになりやすい。そのため、文帝（曹丕）は尊位にいたため過小に評価され、曹植は窮地にいたたため過大に評価された。これはただしい評価とはいえない。

とのべている。注目したいのは、ここの「世間の俗情はうつろいがちで、付和雷同きみになりやすい」（原文

「俗情抑揚、雷同一響」という発言だ。このことばは、明示しないけれども、おそろしく「七步之才」の話による、曹植への判官びいきをいうのだろう。つまり、判官びいきがひろまったので、曹丕の文学はひくく見つもられてしまった、と劉勰はかんがえているのである。とすると、斉末の劉勰のころには、曹植への判官びいきは、そうとうひろまっていたのだろう。

さらに鍾嶸の『詩品』にいたっては、

ああ、詩文の世界における曹植は、たとえれば、人間のなかの周公や孔子、鳥獸のなかの龍や鳳、音楽のなかの琴や笙、女功のなかの刺繡のごとき存在である。

とのべ(上品の「曹植」の条)、曹植を周公・孔子にたとえるにいたった。この「周公や孔子」「龍や鳳」「琴や笙」「黼黻」などは、ただ「最高のもの」の譬喩として提示されたにすぎぬ。だが譬喩だったとしても、この「曹植＝周公・孔子」の比擬は、曹植ブランドの向上におおきく寄与したはずだ。この比擬によって、曹植は詩文創作だけでなく、人格的にも偉大だというイメージが付加されただろうからである。

このようにみえてくれれば、曹植を不遇天才と断じることが、いささか疑問なしとはしない。世俗の判官びいきによる、過褒かもしれないのである。いや、それどころか、委細は不明だが、曹植、もし魚豢がいうごとく、帝位をつかがって、なんらかの行動をおこしていたとすれば、彼は大逆の罪人として、首をはねられてもしかたがなかっただろう。

ところが曹植は、首をはねられることなく、「肅清の危機をのりこえて」なんとか寿命をまっとうすることができた。また死後は、明帝によって罪をゆるされ、文集も編纂してもらい、さらに後代になると、「人間のなかの周公や孔子」という褒辞もささげられたのだった。こうみれば、曹植は不遇どころか、むしろ幸運なひとだっ

たといってよいかもしれない。

そもそも、曹植のような立場のひとは、大逆の罪をおかしていなくても、ただそこで生存し、息をしているだけで、もう危険人物だったのである。私がしるのは、六朝期のことだけだが、当時においては、皇室に長子以外の皇子として生まれ、そしてたいへん優秀であったなら、もうそれだけでじゅうぶん、危険な存在だとみなされがちだった。

当時は長子世襲がふつうだった。それゆえ、皇位すなわち天子の地位も、よほどの事情がないかぎり、長子が相続するものだった。ところが皇位というものが、たいへん魅力的なものだったためだろう、六朝においては、かつてに「よほどの事情がある」といつのつて、長子相続をくつがえそうとする事態、いや陰謀が、しばしば発生したのだった。

たとえば、長子が凡庸であった場合、あるいは凡庸でなくても、より英明な弟や宗族がいた場合、そのとりまきたちが、しばしば不遜なたくらみをくわだてた。凡庸な「と彼らがおもつ」長子をしりぞけて、その英明な「と彼らがおもつ」人物を次代の太子にしようとしたのだった。ときには、現太子をころして、自分たちの都合のよい（あやつりやすい）人物を、太子にたてようとすることさえあった。すると、とうぜん長子や現太子のかわも、そうした動きを察知するわけだから、両陣営のあいだで緊張が発生することになる。かくして、骨肉間ではげしい内訌がおこってくるのである。

西晋武帝の後継をめぐる司馬衷（当時皇太子、後の恵帝）と司馬攸との相克、おなじく西晋恵帝の後継をめぐる愍懐太子の廃嫡、宋文帝の後継をめぐる劉劭（皇太子）と劉駿（後の孝武帝）の闘争、梁の昭明太子死後における太子詮衡、そしてその後の紛糾などが、その例である。とくに宋や齊では、皇位や太子の地位をめぐる攻伐

がはげしく、たとえば、孝武帝の皇子は二十八人もいたのだが、政略にまきこまれて、全員が成年にならぬうちに横死してしまった。そのうちのひとり劉子鸞は、わずか十歳でころされたが、死にのぞんで、「願わくば身の復た王家に生まれざるを」となげいたという。

こうした非業の死をとげた南朝の皇子たちにくらべると、おなじ立場でありながら、寿命をまっとうし、死後に文集も編纂してもらった曹植などは、たいへん幸せだったといわねばならない。

このように、曹植を不遇だったとみなすべきか、幸運だったとみなすべきかは、だれとくらべるかによってかわってくるので、いちがいいにはいえない。私自身は、横死を余儀なくされた南朝皇子たちとくらべ、曹植はずっと幸運だったとおもっているが、ただそれは、後世の気らくな第三者の見かたにすぎない。当事者だった曹植にいわせれば、自分は熱望していた国政参画がかなえられず、望みをつしなうて死んだのだから、幸せどころではなかったぞ、と反論することだろう。

朝廷に冷遇されたから不幸なのか、ころされなかったから幸運なのか。国政に参画できなかったから不幸なのか、死後に詩文をのこせたから幸せなのか。かく議論してゆけば、侃々諤々として決着はつかないだろう。本稿では、この評価のむづかしい曹植という人物について、その生涯をおってゆきつつ、私なりの見かたを提示してみたいとおもつ。

注

- (1) この曹植の回想は、まったくの空想ではなく、曹丕の「典論自叙」のつぎのような一節にもとづいたものである。「時歳之暮春、勾芒司節、和風扇物、弓燥手柔、草淺獸肥、与族兄子丹獵于鄴西、終日手獲麋鹿九、雉兔三十」。どうよ  
うに、以下の二つの回想も、おなじく曹丕の「与呉質書」や「与朝歌令呉質書」に依拠して、場面を構成してみた。
- (2) 本稿では、曹植の生涯については、おおく徐公持『曹植年譜考証』（社会科学文献出版社 二〇一六）にしたがった。ただ疑問があるときは、張可礼『三曹年譜』（齊魯書社 一九八三）や江竹虚・江宏『曹植年譜』（台湾商務印書館 二〇一三）なども参酌した。
- (3) 本稿で曹植の詩文を引用するさいは、おもに趙幼文『曹植集校注』（中華書局 二〇一七）に依拠したが、傅亜庶『三曹詩文全集譯注』（吉林文史出版社 一九九七）、王魏『曹植集校注』（建安文学全書）（河北教育出版社 二〇一三）、曹海東・蕭麗華『新譯曹子建集』（三民書局 二〇一七）、林久貴・周玉容積『曹植全集 滙校滙注滙評』（崇文書局 二〇二〇）なども、適宜参酌した。
- (4) 明帝は曹植らの反対にもかかわらず、遼東征伐を継続し強行せしめた。だがこの戦役は、最終的には成功せぬままおわってしまった。その意味では曹植の見たては、正鵠を射いたのである。だが、曹植はこの年のうちに死んでしまったので、そうした結末を生前にすることはなかったらう。
- (5) 明帝の対宗室政策については、近時、宗室抑圧方針を堅持しようとしたとか、いやあらためようとしたとか諸説があつて、まださだまっていけないようだ。本稿はとりあえず、前者の立場にたつておく。津田資久「曹魏至親諸王攷 魏志陳思王植伝の再検討を中心として」(『史朋』第三八号 二〇〇五)、落合悠紀「曹魏明帝による宗室重視政策の実態」(『東方学』第一二六号 二〇一三)等を参照。